人文社会科学部後援会事業実施報告書

申請者氏名：伊藤哲司・原口弥生

申請 No.1-42

事業区分：学生の教育研究活動支援

対象学年：3 年次 8 人（うち支出者 8 人）

内容

報告項目：社会調査演習Ⅲ合宿（2023 年 9 月 10 日～11 日、於大洗町）

報告内容：以下に記述

漁業従事者からみた環境変動に関わるフィールド研究

現代社会学科国際・地域共創メジャー教授　伊藤哲司・原口弥生

１．合宿のねらい

社会調査の方法を実践的に学ぶ社会調査演習Ⅲの授業（担当：伊藤・原口・寺地・笹野）では、「環境班」と「若者班」の 2 つに分かれて通年の学びを進めている。このフィールド研究は、前者の「環境班」（伊藤・原口担当）に加わっている学生 8 人が、夏期休業の時間を用いて 1 泊 2 日で海辺の町・大洗町に滞在し、大洗町漁業協同組合の協力を得て、シラス漁の体験乗船をさせていただいたり、水揚げとセリの様子を見させていただいたりしつつ、漁師らへのインタビューをさせていただく機会を設けたものである。実際に漁船にも乗り、船に揺られることを体感した上でのインタビューは、よりいっそう深みのあるものとなることが期待できると考えた。

環境班のテーマは「環境変動と地域社会」である。環境変動下におかれた地域社会の有り様、とくにコミュニティに生きる人々に着目した。ここでいう環境変動には、地球温暖化・気候変動などによる自然環境の変化だけでなく、少子高齢化やコミュニティの弱体化など社会環境の変化なども含まれる。むろん自然環境と社会環境は、単純に二分して捉えられるものではなく、相互に連関しあっている。地球温暖化・気候変動の影響は、私たちの社会や文化の在り方にまで影響を及ぼしつつあるし、大災害は自然環境をも一変させることがある。

2 日間という短い期間ではあるが、日帰りの調査では難しい早朝の調査なども含めた展

開を行った。

２．大洗町でのフィールド調査

８人の学生は、それまでの授業での議論の結果３つのグループに分かれていた。それぞれのテーマは「海のゴミ問題」「気候変動などによる海洋環境の変化」「後継者問題」である。今回は３つのグループごとに行動するというよりは、それぞれのテーマを大事にしながら、おおむね一緒に行動した。

そのなかでメインとなったのは、シラス漁の体験乗船である。実際のシラス漁は、未明に出漁してお昼ごろ帰港して水揚げをする。今回、その水揚げの場面には立ち会い、その後のセリの様子も見させてもらった。その後お昼過ぎの時間に漁船を出してもらい、１時間ほどの短い時間で、港からほど近いところでシラスをつかまえる漁の様子を船上で見て帰港した。穏やかな晴れの天気であったが、それなりに船が揺れ、船酔いを少し感じた学生もいたようであった（不調を訴えるほどのものではなかった）。その船を出してくれた漁師に、そのあと漁協の会議室でインタビューを行い、海の環境変化や後継者問題などを問うた。

また早朝は、有志の学生と大洗サンビーチへ出向き、海岸のゴミ拾いを行った。清掃ボランティアをしたというよりは、どのようなゴミが落ちているのかを知ることが目的であった。一見したところあまりゴミは落ちているように見えないのだが、広いビーチを歩いていくと小さな破片と化したプラスチックゴミが散見された。そこで捨てられたものなのか、漂流して届いたものなのかはわからなかったが、昨今問題になっているマイクロプラスチックの問題がおそらくここでもあるのだろうということをうかがい知る機会となった。

３．今後の展開と課題

宿泊した民宿浜の湯は、伊藤が兼ねてから繋がりの深いご主人が経営しており、今回は貸し切り状態で宿泊させていただいた。比較的安い値段で食べ応えのある夕食を出していただき、また気兼ねなく声を出して議論したりすることもできた。

今回参加の学生たちは、伊藤ゼミから４人、原口ゼミからも４人ということで、ゼミ同士の交流会的な要素も加わった。１泊２日の身近い期間であったが、学生同士の懇親も確実に深まったことだろう。後学期もこの授業は続いていく。大洗漁業協同組合と学生たちも直接繋がることができたので、今後は学生が自らアポをとりインタビュー等に行くことが容易になるだろう。漁業関係者とのつながりを深めつつ、さらに環境変動と地域社会の問題を掘り下げた社会調査が展開されることを期待したい。